



Data

監督・脚本：オリヴィエ・マルシャル

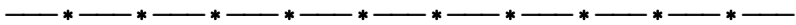
原作：エドモン・ヴィダル『さくらんぼ、ひとつかみで』

出演：ジェラルム・ランヴァン／チエッキー・カリヨ／ダニエル・デュヴァル／ヴァレリア・カヴァッリ／パトリック・カタリフォ／ディミトリ・ストロージュ／オリヴィエ・シャントロー／フランソワ・ルヴァンタル

👁️👁️ みどころ

北野武監督のヤクザ映画は荒っぽくてエグイだけ(?)だが、フランス流フィルム・ノワールのギャングは渋く味がある。青年期は幾多の強盗で「リヨンの男たち」と呼ばれていた主人公も、ギャングの足を洗って久しくなり、7人目の孫が生まれた今になると・・・。

男同士の友情を描いた名作は多いが、友情が大事?それとも家族が大事?その二者択一を迫られると・・・?最近の邦画の「何でも説明調」にはうんざりだが、1発の銃弾のカッコ良さをクライマックスとする本作でも、この邦題にはそんな弊害が・・・。



■□■フランス流フィルム・ノワールは、邦題が・・・■□■

「これぞフィルム・ノワール!」というフランス映画の復活を印象づけたのは、本作と同じオリヴィエ・マルシャル監督の『あるいは裏切りという名の犬』(04年)。本作の主人公エドモン・ヴィダル(通称モモン)を演ずるジェラルム・ランヴァンも登場した同作は、約110分の上映時間内に凝縮されたストーリーをうまく詰め込んでいた(『シネマルーム14』49頁参照)。その面白いストーリーは一級品だったが、私は「この邦題はちょっと・・・?」という小見出しで「それにしても、この『あるいは裏切りという名の犬』という長ったらしい邦題は、一体誰がつけたのだろうか?」と指摘した。

しかして、本作のタイトル『そして友よ、静かに死ね』も「長ったらしくワケのわからない、そして何となく思わせぶりのタイトル」になっている。『リヨンの男たち』という単純な原題に比べると、この邦題はあまりに説明調。今の日本社会の問題点と同じで、何でも丁寧に説明すればいいというものではない、と私は思うのだが・・・。

■□■健さんやマーロン・ブランド並みの、抜群の存在感を！■□■

健さんこと高倉健が81歳で久々に主演した『あなたへ』（12年）は、普段あまり映画を観ない私の友人が2人もわざわざ映画館に行って観たらしい。その2人の感想は2人とも、「落ち着きたい映画だったし、健さんの立ち姿はカッコよかった」と今なお続く健さんの存在感にビックリしていた。他方、ギャング映画の最高峰『ゴッドファーザー』（72年）では、撮影当時47歳だったというマーロン・ブランドが圧倒的な存在感を發揮していた。『ゴッドファーザー』は娘の結婚式のためにファミリーが集まるシークエンスから始まったが、本作もそれと同じように今は引退した老ギャング・モモンにファミリーが集まり、7人目の孫の誕生パーティーをしているシークエンスから始まる。モモンを演ずるジェラルド・ランヴァンは1950年生まれ（本作出演時61歳）だから、健さんとマーロン・ブランドとの中間の年齢だが、その存在感の大きさは2人と全く同じだ。

私はまだ北野武監督の『アウトレイジ ビヨンド』（12年）を観ていないが、その予告編や前作『アウトレイジ』（10年）のイメージ（『シネマルーム24』88頁参照）からすると、凄みを効かした男たちの残忍な手口は目立っても、男の哀愁を漂わせた映画になっているかどうかは疑問。日本でもかつては健さん主演の『昭和残侠伝』シリーズ（65年～72年）のように男の哀愁を漂わせるカッコいいヤクザ映画がたくさんあったが、最近はとんとそんな映画にお目にかかっている。したがって本作では、健さんやマーロン・ブランド並みの抜群の存在感を發揮している俳優ジェラルド・ランヴァンに注目！

■□■テーマは少年期、青年期、老年期と続く男の友情！■□■

本作のテーマは、ジェラルド・ランヴァン演ずるモモンと、これまた渋い演技を見せる1953年生まれの俳優チェッキー・カリョ演ずるセルジュ・ステルとの友情。男同士の切っても切れない友情が生まれるのは、少年期にきっかけがあるケースが多いが、モモンとセルジュの場合はまさにそれ。共にいじめられ、虐げられた体験や、共に盗みを働いた体験が2人を結びつけたわけだ。そして成長した青年時代、刑務所仲間を通じて世話になっていたギャング組織「ドーデの一味」と凄まじい「内部抗争」を展開した挙げ句に袂を分かって、2人は独立していた。1972年リオン、1973年ナント、1974年モンベリアールなどの派手な強盗劇は、すべてモモン、セルジュら一味の仕業で、当時の彼らは伝説のギャング「リオンの男たち」と呼ばれていたらしい。そして老年期の今、モモンは既にギャングを引退していたが、セルジュが13年間の逃亡の末、新任の暴力団担当刑事マックス・プロナー（パトリック・カタリフォ）に逮捕されると聞くと・・・。

そんな風に少年期、青年期、老年期と続く男同士の友情をオリヴィエ・マルシャル監督は少年期の俳優、青年期の俳優（モモンをディミトリ・ストロージュ、セルジュをオリヴィエ・シャントロー）を使って違和感なく手堅く描いていく。現在のストーリー展開の中に回想シーンが頻繁に入るとうとうしいことが多いが、本作では全くそれが無い。老年の男同士が抱き合うシーンなど普通はあまり見たくないものだが、本作のチラシにも使われているそのシーンはまさに本作のテーマそのものだから、じっくり味わいたい。男同士

の友情を描いた名作はアラン・ドロンとチャールズ・ブロンソンが共演した『さらば友よ』（68年）など多いが、そこに本作も追加したい。

■□■映像の切り取り技術は、邦画より一日の長が・・・■□■

デンマーク出身の女優監督スサンネ・ビアの『悲しみが乾くまで』（08年）や『未来を生きる君たちへ』（10年）では、クローズアップ映像の多用が目立っていた（『シネマルーム19』245頁、『シネマルーム27』177頁参照）が、本作でも冒頭からラストまで一貫してクローズアップ映像が目立っている。近時の邦画は画質こそ明るくて美しいが、カメラによる映像の切り取り方が標準的かつ画一的だから、何を観ても同じでインパクトがない。

しかし、『悲しみが乾くまで』でもそうだったが、本作では登場する俳優の顔の彫りそのものが深いためクローズアップにより耐えられるのかもしれないが、彼らのクローズアップ映像が強く印象づけられる。そう考えると映像の切り取り技術は、明らかに邦画よりフランス映画の方に一日の長が・・・。

■□■家族が大事？それとも友情が大事？■□■

2004年6月に亡くなった盲目の黒人歌手レイ・チャールズは12人の子供と21人の孫そして5人の曾孫に恵まれたそうだ。それは『Ray / レイ』（04年）を観れば、よくわかる（『シネマルーム7』149頁参照）。モモンはそこまではいかないが、本作は7人目の孫の誕生パーティーのシークエンスで始まるから、モモンがいかに家族に恵まれているか、そしてまた家族を大切にしてきたかは明らかだ。したがって、いくらセルジュが少年期からの親友で、青年期は共に命を張ってギャング稼業をやっていたとしても、警察に逮捕されたセルジュを救い出すためにモモンが危険を冒す必要はあるの？

もっとも、単にセルジュが警察に逮捕されただけなら、裁判を受けて罪を償うのは当然だから、モモンがあえて動く必要はない。ところが、孫の誕生パーティーの最中にモモンに入ってきた報告では、セルジュは麻薬取引の仕事スペインで一緒にしていた悪党ゼルビブを裏切ってリヨンに逃げてきたらしい。すると刑務所に入っても刑務所内にいるゼルビブの手の者から命を狙われることが確実だ。そう聞いても、当初のモモンは「それはセルジュの自業自得だ」と「正論」を述べて妻のジャヌー（ヴァレリア・カヴァッリ）を安心させていたが、どうも内心は心が揺れ動いていたらしい。

その結果、モモンは直接手を下さず、囚となってブローナー刑事を引きつける役割に徹したが、セルジュの義理の息子カルロとその仲間がド派手なセルジュの奪還作戦を執行したから事態はややこしい方向に。家族が大事？それとも友情が大事？と聞かれれば、モモンは「両方とも大事」と答えるのかもしれないが、やはりそれはムリなのでは・・・？モモンとその昔からの仲間であるクリスト（ダニエル・デュヴァル）やダニー（リヨネル・アスティエ）らは13年ぶりに果たしたセルジュとの再会を喜び、セルジュを警察やゼルビブの追及から逃れさせるべく動き始めたが、さてその代償は？

■□■ギャングのボスたちの安全保障体制は？■□■

いくら山口組の高級幹部であっても、それぞれ家族がおり家庭があるから、常時家族と一緒に山口組本部の中に籠もって子分たちに護衛された生活を送ることはできない。そうかといって私邸(?)に戻れば、いつ刺客に襲われるかわからないから、その安全保障体制をどう構築するかが大問題。つまり、今の日本のように外交や軍事問題にノー天気な状態では、いつどこに誰から侵入されるかわかったものではないということだ。

そんな不安を持って本作を観ていると、まずはモモンの自宅に怪しげな人物が忍び込んだかと思うと、モモンと妻がかわいがっていた犬が血祭りに！これはモモンがセルジュを警察から奪還し、どこかに匿っていることへのゼルビブからの警告で、次はモモンの妻等に危害が及ぶことが明示されたが、それに対するモモンの対策は？モモンが考えたそれは、誰にも知られていない郊外の別宅にセルジュの娘リルとその息子ルカを隠し、クリストに護衛させることだったが、その程度の安全保障体制でホントに大丈夫？そう心配していると案の定・・・。



全国順次公開中 配給：コムストック・グループ
(C) 2010 LGN FILMS GAUMONT FRANCE 2 CINEMA HATALOM RHONE-ALPES CINEMA

■□■裏切り者は誰だ？それは誰の口から？■□■

『ゴッドファーザー』や『ゴッドファーザーPART II』（74年）を観れば、マフィアの世界でも、日本の政治家の世界や今回の薄熙来（ボシーライ）事件を生んだ中国共産党の世界と同じように、権力争いには「裏切り」がつきものであることがよくわかる。ま

た、それらの権力闘争の世界では武力や金力と同じように情報力が大切だから、何が正しい情報で何がガセ情報かの判断が勝敗を分けることが多い。モモンとセルジュが少年期からグレていたのは、彼らがいわゆるロマつまりジプシーの血筋だったことも原因の一つらしいが、派手な強盗劇をくり返ししながらロマのキャンプに隠れ住んでいたモモンとセルジュたち仲間がある日、大量の武装警官に取り囲まれたのは一体なぜ？アメリカン・ニューシネマの代表作『俺たちに明日はない』（67年）では警官に取り囲まれたボニーとクライドは壮絶な最期を遂げたが、モモンとセルジュは仲間たちと共に一斉にそこで逮捕されることに。しかして、その隠れ家がバレたのは一体なぜ？裏切り者は一体ダレ？

オリヴィエ・マルシャル監督はそんなミステリアスな論点をチラチラと示しながら、モモンがセルジュとの友情に引きずられ、次々と犠牲を強いられていく姿を描いていく。しかして今やっと、あの時の秘密＝つまり裏切り者は誰だ？が明らかにされるのだが、それは何とプロナー刑事の口からだったから意外。そりゃウソだろう。プロナー刑事は俺をハメるためにウソをついているにちがいない。あくまでモモンはそう考えたが・・・。

■□■ 1発の銃弾のカッコ良さをじっくりと！ ■□■

『ロシアン・ルーレット』（10年）はカネのために命をかけてゲームに参加する電気工のヴィンス・フェローを描いた映画だった。6連発銃に弾が1発なら死ぬ確率は1/6、弾が2発ならそれは1/3になるわけだから、ロシアン・ルーレットほど危険なバカげたゲーム(?)はない。しかして、本作のラストに訪れるクライマックスは、銃を持ったモモンがたった一人でセルジュの隠れ家を訪れるシークエンスとなる。モモンは何のために今そこを訪れたの？銃を持ったモモンはそこでセルジュに対して何をするつもりなの？最近の「何でも説明調」の邦画ではそれをセリフでしゃべらせるのかもしれないが、フランス流フィルム・ノワールの傑作はそんなことはしない。その後の展開を予測するのはあくまでモモンの表情からのみだが、その表情からすべてを読み取ることができないのは当然だ。

9月27日に観た邦画『カラスの親指』（12年）でも、1丁の拳銃（といってもこれはモデルガン）が後半からのストーリー展開に大きな意味を持っていたが、本作のクライマックスでモモンが持つ拳銃が果たす役割とは？そこに1発の銃弾しか入っていないことはモモンのセリフによって明らかにされるのだが、さてその銃弾はどのように使われるのだろうか？中国映画『さらば復讐の狼たちよ（譲子弾飛/LET THE BULLETS FLY）』（10年）でも原題どおり銃弾が大きな役割を果たしていたが、これは圧倒的な数量の銃弾だった。しかして、本作のクライマックスに見る1発の銃弾のカッコ良さはあなた自身の目でしっかりと。もっとも、そこでネタバレになる心配があるのが、本作の邦題だが・・・。

2012（平成24）年10月5日記